

Ⅱ－２ 中学部の実践

Ⅱ－２ 中学部の実践

1. はじめに 43
2. 実践「店員さんになって、ポップコーンを販売しよう」 45
3. まとめ 59

Ⅱ－２ 中学部の実践

1. はじめに

(1) 中学部で目指す姿

力いっぱい活動に取り組んだ経験が、生徒のキャリア発達を促す。これまでの研究の積み重ねの中から導き出してきたのはこうした考えである。昨年度以来取り組んできたキャリア教育の視点から、中学部段階でなすべきことは、高等部や社会で必要となる技能を先取りで学習することではなく、中学生として力いっぱい活動し、中学生として経験を積み、中学生としての生活を全うすることなのではないかと考えてきた。真剣に中学生生活を送った経験が将来に役に立ってくる。そういう姿を目指して研究に取り組んできた。昨年度の研究においては、本校中学部が生徒の成長を支援する上での方針として以下の3つを示した。

- ・ 仲間と協力して一つの活動に取り組み、成し遂げること
- ・ 自己の意思を表現し、主体性を持って活動すること
- ・ 社会生活や「働く」生活に対する関心と意欲を持つこと

この中でも「仲間と協力して一つの活動に取り組み、成し遂げること」が特に重要であると考え、意図的に授業に取り入れていった。これは、「領域や教科に分けられる以前の未分化な生活活動そのものを教育内容とする」という領域・教科を合わせた（分けない）経験主義的な指導を、大きな集団で活動を展開するという、中学生に相応しい内容で実施するという意味である。実践や職員研修を進める中でこうした認識を共有するようになってきた。

これまで中学部では、一つの学習グループで始まった活動が、中学部全体を巻き込んで広がっていく活動実践を報告してきた。こうした大規模な活動が、仲間への共感意識や達成感、主体性を育てるのに有効であると考え、実践を進めている。今年度も実施されたポップコーン用トウモロコシの栽培を行う「里山学習（総合的な学習の時間）」でも、あらためて規模の大きな活動は、生徒が力いっぱい活動するのに適した活動であることを確認した。この里山学習のトウモロコシ収穫の授業で、見通しの持ちづらい授業への参加が難しい生徒達も、主体的に参加できた事例があったので紹介したい。この授業ではすべての生徒が進んで収穫作業に取り組んでいた。理由として考えられたのは、①昨年も取り組んでいたため、見通しを持ちやすい ②周囲の生徒や教師の活動する様子を見てやるべきことがわかった という2点である。特に②の理由はこの活動が、規模の大きな活動だったからこそではないかと考えている。数百本のトウモロコシが植えられた畑では、他の生徒が活動している様子をじっくりと観察してそれから活動に臨んでも、まだ収穫すべきトウモロコシは大量に残っている。活動量（この場合は収穫量）の多さ自体が、生徒に対する支援となるのではないだろうか。また、中学部の全員が参加していたことで仲間に対する意識が芽生え、共感する気持ちや達成感が育まれる。

中学部が目指すのは「生徒が力いっぱい活動に取り組む姿」である。今回はそのための授業や支援を、平成20年度以来取り組んできた研究の理念に学んだ、生徒の内面の理解の考え方をを用いて改善していく取組を紹介する。

(2) 教育課程の特徴

本校中学部の教育課程における特徴は、学校生活の様々な場面でグループ学習を取り入れていることである。このグループは、作業学習での縦割りグループを基本としながら、生活単元学習や美術、給食指導も行う。そのため様々な領域・教科を合わせて単元化した授業を実施することができる。

以前は縦割りグループで行う「グループ学習」の時間があり、生活単元学習や作業学習や美術を、生徒の使用する時間割上では区別せずに「グループ学習」として実施していた。その授業から年間を通して一つの作業種に取り組む作業学習が独立したという経緯がある。そのため、本校中学部の作業学習は、表Ⅱ-2-1のように学校行事やそのほかの領域・教科と関連しているものが多い。

表Ⅱ-2-1 作業学習と関連する行事・授業

作業学習	関連する行事・領域・教科	内容
自転車整備	運動会	団体演技のための自転車整備、補助輪の取り付け・取り外し
	サイクリング遠足	事前の自転車整備（生徒、教師、ボランティア学生分）
ポップコーン作り	里山学習（総合的な学習の時間）	トウモロコシ栽培・収穫
	生活単元学習	学習発表会に向けた試作・出店準備
	学習発表会	販売活動（ポップコーン、豆）
和紙作り	生活単元学習	学習発表会に向けた出店準備

生活単元学習はⅠとⅡに分けている。Ⅰは学級（学年）ごとに、Ⅱはグループごとに実施している授業である。グループ編成は教師の判断で行っている。生徒と日々接する中で、作業種の希望を聞くことはあるが、一斉に行う希望調査などはしていない。作業学習は職業訓練的な目的で行っているわけではないので、毎年グループを変更することもあれば、3年間同じということもある。すべての作業種を網羅的に体験するよりも、生徒の実態に合った活動を実施できるグループ編成が望ましいと考えている。今年度のグループ分けは表Ⅱ-2-2のようになっている。

表Ⅱ-2-2 今年度の作業グループ

生徒たちがつけたグループ名	主な作業学習の内容	1年生	2年生	3年生
ブラックレーサーグループ	自転車整備	2名	2名	1名
ロケットしんかんせんグループ	ポップコーン製品作り	2名	3名	2名
くるまグループ	紙漉き、和紙製品作り	2名	1名	2名

2. 実践 中学部ブラックレーサーグループ

生活単元学習・作業学習「店員さんになって、ポップコーンを販売しよう」

(1) 教育課程における生活単元学習・作業学習の位置づけ

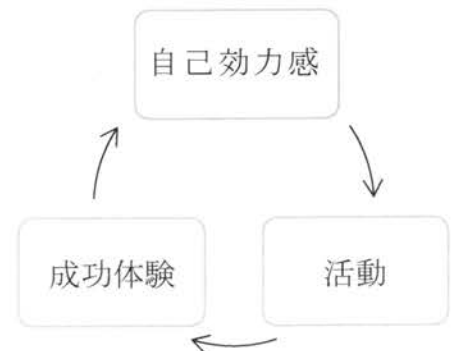
教育課程上では生活単元学習Ⅱと作業学習の時間が区別されているが、いずれの授業も同一のグループで行っている。そのため、作業学習に関連した学習を生活単元学習Ⅱの時間を使って行うことが可能である。今回取り上げた授業でも、販売活動（生活単元学習）を行う事前の取組として、ポップコーンの選別作業という作業学習を実施している。生活単元学習と作業学習が連動した形で一つの単元が構成されている状態である。

(2) 単元設定の理由

まず、本校中学部の生徒の実態を次のように捉えた。

- ・活動には前向きだが、生活経験が限定的な場合が多い
- ・一人で活動するよりも、友達と協力することで活動の幅を広げられる
- ・集団活動の経験を積むことで、生徒同士の主体的な関わり合いが増えてくる

部研究会での話し合いの結果、経験不足の解消を目指して、活動量を増加させようという結論に至った。力いっぱい取り組むというだけで、多くのことが身についてくる。生徒たちには、活動に前向きに取り組んでほしいと考えた。しかし、そこで問題となるのが自己効力感⁽¹⁾の低さである。特に様々なことをする力があるにもかかわらず、自信⁽²⁾のなさから活動への取り組みをためらう生徒の存在が気になった。自己効力感は様々な要因によって高めることができる。成功体験はその代表的な要因であるが、そもそも取り組むことができなければ成功も失敗もない。第一歩を踏み出せる自信が必要と考え、自信をつけることを目標とした単元を設定することにした。



その活動の機会として選んだのが学習発表会である。学習発表会では毎年、里山学習で栽培したトウモロコシからポップコーンを作り販売している。里山学習での栽培・収穫の活動には、総合的な学習の時間で生徒全員が参加しているので、普段ポップコーン製造を担当するグループ以外の生徒でも、全員が原料調達までの流れを体験しており、製造販売の単元に接続しやすい。今回の単元では、この学習発表会でのポップコーン販売を行うことにした。単元の構成としては以下の二部分に分かれている。

- ① 販売に自信を持って取り組めるような事前学習
- ② 普段接触のない人を相手にした販売活動

②は販売に参加するすべての生徒を対象とした、主となる取組である。キャリア教育の視点からしてもこちらの活動が中心的な活動であるが、本稿ではその活動に取り組むまでの①の学習を中心に紹介する。

(3) 単元の目標

- ・商品製造や販売活動に積極的に取り組もうとしている【関心・意欲・態度】

- ・お客さんを意識し、衛生面や態度面に留意して活動する【思考・判断・表現】
- ・お客さんの気持ちを考えた接客や商品製造ができる【技能】
- ・接客をする際の態度や言葉遣いを知る【知識・理解】

(4) 単元計画	総時数	17時
第一次	ポップコーンの選別作業と袋詰め	4時
第二次	よい接客について考えよう	7時
第三次	出店の準備	3時
第四次	学習発表会でポップコーンを販売しよう	1時
第五次	販売活動を振り返ろう	2時

(5) 学習活動の様子

①対象生徒 A子(中学部1年)

②A子の実態

A子は中学部から本校に入学してきた生徒である。入学当初から自信のなさが目立つ生徒で、保護者によれば、小学校時代「できない」が口癖であった。この自信のなさは小学校の低学年からのことらしい。周囲の友達と同じようにできない。がんばったのにほめてもらえない。そして家に帰ってから泣く。本来まじめな性格のA子が、こうした経験の中でやる前から「できない」と決め付けることが多くなっていったのは想像に難くない。

この「できない」の背景としては、失敗したくないという考えが強く、「失敗するくらいならやらない方がまし」という考えが普段の行動から見て取れる。また、失敗する、しないに関しても、その評価の基準を他人に求めることがほとんどであった。友だちと接する際の様子でも、先生がだめと言いなことを先回りして「ダメだよ」という姿や、「ダメだよ」と言った後に教師に確認するような目線を送ることもしばしばあった。また、美術の授業で「線(紙テープ)で画面を構成する」という、具体的なモチーフのない非具象の作品を制作する課題を行った際に、どうしたらいいかわからないということもあった。描くべき対象(モチーフ)のある具象絵画であれば、人物、静物、風景など、描くものがわかりやすい。しかし、線で自由に構成することを求められる非具象作品では、自分自身の思い描くイメージや、描画動作もしくはそれによって現在制作の進んでいる作品からよりよい構成を考え出さなければいけない。「好き勝手にしてもよい」と思えるのであれば、そのように難しく考えなくても制作は進むのだが、絶対に失敗をしたくないA子にとっては難題といえる。結局この課題でA子は風景を描いていた。

しかし、中学生になってから自信がついてきたと感じられる点も多く見られる。特に家庭での様子的変化は顕著なようで、「中学生なんだからできる。」という言葉が出てくるようになってきたという。入学当初はスクールバスで通学していたが、路線バスを利用できるようになったのは、「中学生なんだから」という意識が挑戦を後押ししていると言えるだろう。一方で、学校での失敗を家に帰ってから泣いてしまうことは依然としてあるらしい。運動会で自転車の操作を見せる団体演技を行った際、A子は練習で何度も成功していたにもかかわらず、本番で成功することができなかった。そのことについて家で泣いてしまったが、立ち直りは早かったという。練習でがんばっていたことを認められたり、練習を積むことでできるようになったりした経験等を通して、自信が芽生えてきたのではないだろうか。

③ A子の単元の目標

- ・積極的に販売活動に臨もうとする【関心・意欲・態度】
- ・お客さんを意識し、態度面に留意して活動する【思考・判断・表現】
- ・お客さんの気持ちを考えた接客や商品製造ができる【技能】
- ・達成感や自己効力感を得るために、よい接客方法を学び実行する【知識・理解】

④ A子の学習の様子

当初、単元を始めるにあたっては、A子だけでなく、同じグループに所属するB子、C男の3名の自信をつける取組として計画された。単元としては学習発表会当日の販売活動を通じての生徒の成長をねらったものである。その中でも、自信がないと予想された3名が学習発表会当日に力いっぱい活動できるための支援、指導を探る取組部分を中心に報告したい。

A子、B子、C男は多くの教師が自信のなさを感じる生徒であったが、行動等を観察し、内面を推察する中で大きな違いがあることがわかった。A子はできそうな活動に対しても自信が持てず、行動に移すことができない。B子は自分にできない活動をよく認識していて、慎重になるため行動しない。C男は読み書きに困難があり、わからないからやらないという状況であった。B子、C男は自己効力感が低いものの、自信がないわけではないということがわかった。自己効力感の低さ一つをとっても、実態に大きな違いがあったのである。そこで、今回の取組では「自信のなさ」が問題となっているA子に焦点を当てて授業を進めることにした。

ア. 行動観察を元に考え方の特徴を探る

A子の様子を観察する中で、まず注目した行動は、10月26日のポップコーン粒の袋詰め作業での言動である。T2がT1にポップコーンのパッケージに貼付するレシピを書いた印刷物について「エラー（貼り方を間違えて廃棄した分）は4枚あった。」と伝えた際、「エラーが多いね。ポップコーン（を落とした数）よりは少ないけど。」とつぶやいた。この日の作業では、グループ全体でポップコーン粒を5粒を落としてしまったが、A子が落とした訳ではない。また、レシピを貼り間違えたのもA子ではなかった上に、教師二人の事務的な連絡に聞き耳を立てて反応している。このことからA子の失敗への注目の強さは、「失敗への恐れ」と言ってもよいのではないかと推察した。そして、翌10月27日の接客シミュレーションの授業では、この推察が裏付けられる結果となった。生徒全員がシミュレーションを終えて、一人目の生徒の接客の様子について動画を見ながら確認をした際、言葉遣いや視線について指摘されるのを聞いて、「気がつかなかった。」「私も下を向いていた。」とつぶやいていた。二人目のA子の接客について、A子の良くなかった点を指摘されると、「ごめんなさい…」とだけつぶやき、その後は授業の終わりまで落ち込んでいる様子だった。

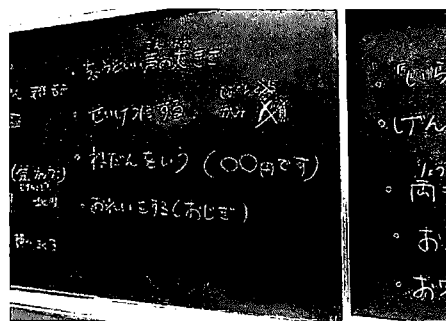
しかし、この日のA子の様子から、自信をつけるための支援の糸口も見つかった。一人目の生徒が言葉づかいを指摘された際の「気がつかなかった。」と、視線について指摘された際の「私も下を向いていた。」というつぶやきである。A子はこれらの指摘が他の生徒に向いていたものであるにもかかわらず、既有知識や自分の行動に対する自己認識と照らし合わせて客観的に判断することができている。また、映像を情報源としていた段階（ビデオを見たとき）では認識していなかったことが、言語化されたことで認識できるようになっている。これはA子とB子の考え方の特徴を比較することで、より明らかとなってきた。（49ページ 図Ⅱ-2-1, 2参照）

A子の失敗に対する極度の恐れや考え方の特徴が明らかになったことで、授業の方向性をA子の指導に重点を置いた形で進めることになった。以下がその方針である。

- ・「よい店員」の行動基準を言語化し、リスト化できるようにして示す
- ・否定的な指摘がされた際には、どういう行動がよいのか肯定的な行動基準に置き換える
- ・練習では失敗しても仕方がないということを、ことさら強調する
- ・予行練習を多く取り入れ、不安を解消する

イ. 指導方針を基にした事前学習の取組

10月28日の授業では上記の指導方針に則って授業を行った。まず、否定的な指摘が多かった前回の授業を受けて、どうすればよかったのか肯定的な表現に置き換える活動からはじめた。この活動の中で早くもA子の変化を感じ取れる様子が見られた。「よくなかったところからいい方法を考えて。」という教師の投げかけに対し、「下を向くとよくないから前を向く。」と笑顔で答えた。自分も接客の際に下を向いてしまっていたと考えていたA子が、その失敗を隠したりごまかしたりするのではなく、



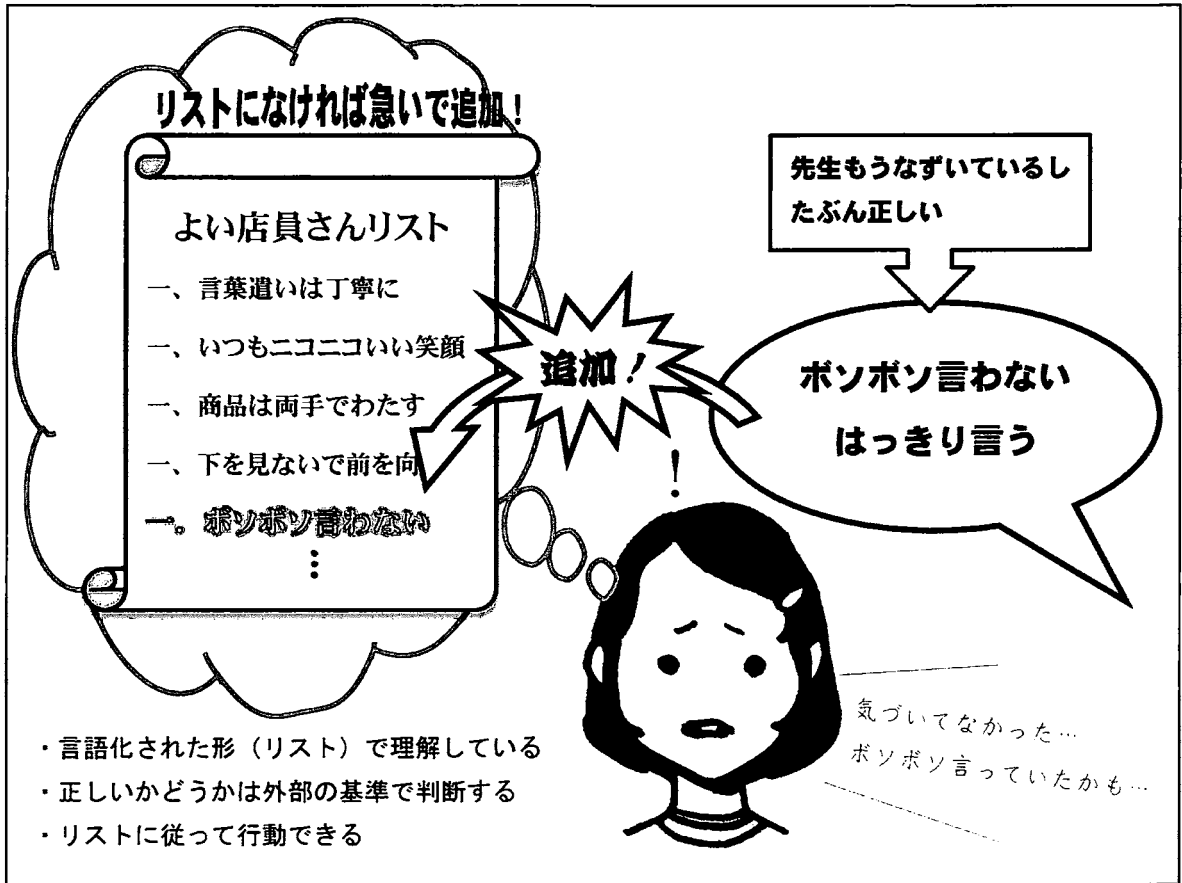
写真Ⅱ - 2 - 1

よい行動を言語化した板書

前向きな意見につなげることができていた。「前日に失敗した < いい意見を出せた」という図式が成り立つことで、前日の落ち込みを挽回することができたのではないだろうか。この日はよい店員の行動について理解を助ける支援も行った。我々が「リスト化」と呼んでいる支援であるが、実際により店員になるためのリストを作成するわけではない。彼女は頭の中に「よい店員さん」の条件を言語化された状態で、リストのような形にして記憶していると推察される。そこで、事前学習の取り組みとしてはこのリストを充実させられるように、よい店員の行動や心がけを言語化し、板書等で示すようにすることにした。(写真Ⅱ - 2 - 1) こうした支援の結果、シミュレーションを行った際にも自信を持って取り組んでいるように感じられた。この日の接客について感想を求められたA子は、「今日はちょうどいい声が出せた。」と笑顔で答えている。

10月29日の授業では、高等部のクッキーショップで飲み物を購入し、接客の様子を見学するとともに、接客の際にどういうことに気を配っているのか聞くという研修を行った。A子は高等部の生徒相手でも接するのが怖かったようで、現場での高等部生徒の接客態度は見る余裕もなかった。しかし、接客の際に気を付けていることを高等部生徒に質問した中で、「ボソボソ声ではだめ。はっきりと話す。」という言語化された内容に関してはしっかりと覚えており、言語化する支援の有効性が裏付けられた。

11月2日の授業ではクッキーショップでの研修で学んだことを言語化し、A子の中の「よい店員さんの条件リスト」を充実させることにした。これまでは「いらっしゃいませを言う」や「両手で商品を渡す」など、具体的な行動についての内容が多かった。しかし、高等部の生徒から「お客さんに喜んでもらいたい」など、具体的な行動の裏づけとなる考え方を学んだので、こうした内容も動画を見ながら言語化した。抽象的な内容であったが、A子にとって分かりやすい方法で示すことで理解を促すことができたように感じた。



図Ⅱ-2-1 A子の考え方の特徴（推察）



図Ⅱ-2-2 B子の考え方の特徴（推察）

11月5日はチケットなど、店を開くのに必要な物品の用意を行った。店での接客システムは以前から教員間で話し合っており決まっていたものの、実際に使う道具の準備はこの日までしていなかった。そのため、この日が実際と同じ形式での練習を行える初日となった。詳細は次項「ウ、学習発表会当日」で示すが、新しい方法であっても、生徒たちには混乱もなく、スムーズに移行することができていた。

11月6日は前日準備と練習を行った。これまで接客の練習には参加していなかった、本来ポップコーンの製造に携わっているグループも合流し、準備と接客の練習を実際と同じ配置で行った。この準備の時に、A子はこれまでの活動ではあまり見られなかった主体的な姿を見せた。これ以前の活動では自分から率先して活動することがあまりなく、指示待ちとなるが多かったが、この日は進んで準備に携わる様子が見られた。この様子はA子の成長として行動観察の記録からも明らかなので「エ、A子の主体性が見られるようになった事例」の項で紹介したい。この時間に接客の練習を行った際のA子についてであるが、学んだことを生かし、堂々と接客する姿が見られた。その様子は販売当日も怖気づくことなく活動できることが期待できるものであった。

ウ、学習発表会当日

学習発表会当日のポップコーン売り場はA子に限らず、生徒全体への支援として活動内容の分業化が行われた。前年度は金銭授受と商品の引き渡しと同時に行われていたが、それでは接客業務が煩雑で、生徒たちは接客の質にまで意識を向ける余裕がなかったのではないかという反省があった。その反省を受けて改善したシステムは、金銭授受と商品の引き渡しを分けて、その間をチケットで繋ぐというものである。さらに商品の引き渡しもポップコーンカップ、飲み物、ポップコーン粒の三か所に分ける。仕事としては4つに分かれるので、生徒の実態と本人の希望に応じて仕事を振り分けた。

A子は飲み物の引き渡しの係として販売に臨んだ。仕事の内容としては、客からチケットを受け取り、飲み物をプラスチックのカップに規定量注ぐ。飲み物は3種類あるが、チケット購入の段階で飲み物を選んでいるので、チケットを見て合ったものを注ぐだけでよい。生徒の中には緊張した面持ちの生徒もいたが、A子は開店前から笑顔で、余裕があるようだった。開店すると客はチケットを販売する係の前に列をなした。最初にチケットを購入した男性客は商品引渡しのカウンターへとやってくるが、ポップコーンの担当者に飲み物のチケットを渡してしまった。ポップコーンカップの引渡しを担当する生徒がどうしたらいいかわからない様子で見ているのを見て、「(飲み物は)こちらですよ。」とA子が笑顔で告げた。A子は高等部のクッキーショップで研修した際に、先輩の男子生徒相手でも怖がっていたように、大きな男の人を怖いと感じている。それにもかかわらず、知らない男性客を相手に笑顔で接することができた。しかも、ポップコーンカップ担当の生徒に任せることができたシチュエーションでも、進んで声をかけていたのである。笑顔で接することも、はっきりと話すこともすべて、「お客さんに喜んでほしい」という気持ちから来るということを理解していたからこそ、最も緊張する最初の客相手に積極的になれたのではないだろうか。その後も45分間、店員として「お



写真Ⅱ - 2 - 2 笑顔で接客するA子(手前)

客さんに喜んでもらえる接客」に勤めるA子の姿があった。飲み物のチケットを持った客には「飲み物はこちらですよ。」と積極的に声をかけたり、小学生には視線を下げて接客したりする様子が見られた。

エ. 主体性が見られるようになったA子

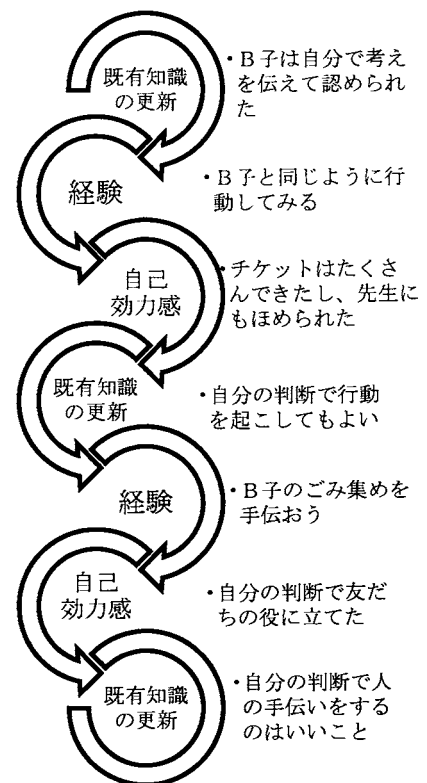
ここまで、自信を持って接客できるようになるまでの様子を紹介したが、A子の主体性についても変化が見られたので紹介したい。

A子には主体性の面でも課題を感じていた。今回の授業で、まず気になったのは、10月26日にポップコーンの袋詰め作業をした後の片付けの場面である。教師の指示で片づけを始めた際、S子は袋詰め作業で使用していたシーラーを前に、「これどうしたらいいですか。」と教師に尋ねた。「これ片付ければいいですか。」や「どうやって片付ければいいですか。」なら自然だが、片付ければいいものを目の前にして、どうすればいいかをたずねるのは不自然だと感じた。このときのA子の考えを次のように推察した。自分の考えを述べると否定される可能性がある。例えば「片付ければいいですか」→「片付けなくてもいいよ」のように。否定はされたくないの、自分の考えを言うよりも全面的に教師の裁量を仰ぐのがよい。このように考えたのではないだろうか。

ほかにも授業中のA子の行動には特徴的なものがあった。教師が「やりたい人。」と立候補者を募ると、必ず2番目に立候補する。また、どこかへ移動する時には先頭を歩かないで、2番目に位置取りをする。こうした特徴があった。これは進んで活動に参加したいが、先頭は不安なので誰か一人に先にやってもらった後、最初にできる2番目を選んでいのではないかと推察した。この行動は自分にとって取り組みやすい方法を工夫しているので、むしろ推奨されるべきものとも言える。

こうした考え方のため、A子は主体的に行動することが少ないと考えられる。「否定されるくらいなら、言われてから動く」「最初にするのは自信がないから、誰かの後にする」ということを、意識的に行っていると推察できる。それならば、不安がある中でも、精一杯参加できる方法を選択していると評価し、今回の授業ではこの主体的な行動の少なさをあまり問題視しなかった。

ところが、そうしたA子の活動の仕方に、数日間に変化が現れた。変化が見られたのは11月5日のチケット準備の日である。この日もA子は、作業前の準備で、友達に促されてから机を運んでいるような様子であった。2時限目からチケットの準備を行い、3時限目の前に休み時間（普段からとっている20分休み）を挟むことになった。切りのいいところで終了して、生徒は休憩に入ったが、B子が「休み時間も(チケット切りを)やりたい。」と言い出した。教師が作業を続けてもいい事をB子に伝えると、A子も「私も、休み時間も切りたい。」と言って一緒に作業を再開した。もともとA子とB子は仲がいいので、「遊び相手が作業をするなら」という気持ちがあったのかもしれない。また、もともと手作業は好きな方である。「けっこう楽しい。」と言いながら休み時間も作業を続けていた。



図Ⅱ-2-3

A子の既有知識が更新していく様子

その後、授業が再開され、チケット切りの作業は続き、すべてを切り終えた。すると、B子が切り終えた後のごみを集め始めた。その様子を見てA子はすかさずゴミ箱を取ってきて手伝い始めた。これまでのA子なら、ゴミ箱をとってくるように頼まれてから動いていただろう。これが「否定されるくらいなら、言われてから動く」A子が主体的に活動するきっかけとなった。

11月6日は前日準備である。この日のA子は準備のための活動に率先して取り組んでいた。机を運んだり、台拭きを取ってきたりと、テキパキと活動していた。一方、この日のB子は働く気になれなかったようで、普段の積極性を欠いていた。A子は前日のようにB子をお手本とすることができなかつたので、自分の判断で動いていたと言える。また、準備の後の練習で、「(店員を)やってくれる人。」と教師が呼びかけたのに対し、最初に手を挙げていた。挙手が2番目でなかつたのも、この時が最初であった。

こうしたA子の変化は、自信をつけていった内面の変化と同様に説明できる。B子が自分の判断で活動に取り組み、それを教師が追認する。それを見たA子は、独断ともいえる行動であっても、役に立つならやってもいいのだということを知る。これについては、指導者が言語化していないが、11月5日の活動で、自ら「やってもいいこと」のリストに加えることができたのだらうと推察できる。さらに、練習の際に最初に手を挙げたのも、自信をつけることで主体性が引き出されたといつてよいだろう。既有知識が更新されることで自信(自己効力感)が増し、主体的な行動(経験)が増える。その経験を元に既有知識が更新されるという循環で成長できたと言えるのではないだろうか。生徒同士の学びあいの中で、教師による指導と同等、もしくはそれ以上の結果を引き出した。(図Ⅱ-2-3)

⑤評価と考察

ア. A子の単元の目標及び単元を通してのキャリア発達について

キャリア教育の定義^③に今回の実践をあてはめると、「A子の社会的・職業的自立に向け、『練習の積み重ねによって獲得した自信を元に、積極的に他者と接する力』を育てることを通して、キャリア発達を促す」取組を行ったということになる。この「練習の積み重ねによって獲得した自信を元に、積極的に他者と接する力を育てる」という一文が、この単元の目標を端的に言い表している。この目標は達成できたと考えている。

A子の行動に移れない理由を、失敗への注目の強さから「失敗への恐れ」と判断した。そして、他者への批判を聞いた際の「私も下を向いていた。」というつぶやき等から、言語化して理解しているという考え方の特徴を推察し、失敗への恐れを解消するために、言語化の支援を行った。この支援により知識が充実し、A子は安心して接客練習に取り組めるようになった。図Ⅱ-2-4は学習発表会後のA子の感想文だが、この文章からも、「よい店員さん」の行動を言語化した形で把握していたことが伺える。文章を読むと、頭の中の言語化されたリストと照合して、販売当日にそのリストにあることができていたかという方法で反省していることがわかる。特に、最後の「りょうてでうまくできました」は、大切だった項目を後から思い出して、原稿用紙にはもう書けないにもかかわらず、付け加えずにはいられなかつたというA子の思いが感じ取れる。

学習発表会でポップコーンの店員さんをしました。のびのびの店員を
しました。おみやぐんがはいはい
来ていたのできんちようしたけど
できました。1回目はいらうい
ませをいわすれちたけど2
回目と言えました。はずかしが
たけどがんばりました。おみやぐ
おもてました。また、店員を
やりたかったです。店員をする前は
いらしゃいませをいえるかしん
はいでした。おしごとをやってみ
て、大へんでした。りょうてでま
くできました。

図Ⅱ-2-4 A子の感想文

支援を受けている状況で練習に取り組むことで自信をつけていった様子は、積極性が増したことから伺える。やりたいけれど自信がないというA子の気持ちは、いつも2番目に行動しようとする姿にあらわれていた。販売活動直前の練習で1番目に行動しようとしていた姿は、自信の表れと考えられる。「練習を積み重ねたからできる」という経験ができたのではないだろうか。

図Ⅱ-2-4の感想文では、「きんちょうしたけどできました」「いいわすれちゃったけど2回目は言えました」「はずかしかったけどがんばりました」のように、「否定的表現+だけどできた」という表現が多い。この文面からも、困難な状況でやり遂げたという、彼女の思いが読み取れる。

これらの「練習を積み重ねたからできた」や「やり遂げた」経験は、実感を伴った自信を生み出すと予想される。A子は中学生になってから、自己効力感を得られるような多くの体験を積んできた。今回の取り組みも、その一つとなったと確信している。

イ. 単元設定及び授業の展開について

本単元はA子、B子、C男の3名の、自信に起因する自己効力感を高める取組として始まった。その中で、自信のなさに起因する自己効力感の低さが際立っていた生徒はA子であったため、A子が自信を持てるように授業展開することとなった。よい店員の行動を言語化するという内容の授業はA子に適したものであるが、言語での理解の苦手なC男には向いていない。この単元はA子に関して言えば妥当性の高い授業が中心であった。しかし、C男の得意とする、実践を通した授業も取り入れるなど、単元を通しての学びは、他の生徒についても保障されていたと考えている。

学習発表会当日の取組としては、前年度の反省を受けて、生徒の販売業務を分業し、各自の技術的負担を軽減した。これにより、生徒たちは教師の助けを借りなくても販売活動を行なうことができた。こうした支援により生徒の主体性を引き出すことができ、結果として「できた」という達成感から自己効力感が育まれたと推察している。

月日	教師・他の生徒の働きかけ 周囲の環境の変化	生徒の行動 (A子)	A子の内面(推察)				その他
			要求	知識	自己認識	自己効力感	
10月15日	<p>「小学校でアイロンビーズを販売し たことがある」</p> <p>「バイキングに行きたい」</p> <p>「たのしい」 どの仕事にも意欲的に取り組んでい る</p> <p>「選別楽しい」 笑顔</p> <p>おしゃべり</p> <p>指示待ちで動く</p>	<p>「小学校でやった販売と同 じだ」</p> <p>販売を成功させればバイ キングにいける</p> <p>仕事のやり方がわかった</p>	<p>ほめられたし、上手くて いい</p> <p>選別は上手にできている</p> <p>自分の仕事は今ない 仕事に来るのを待って いればよい</p> <p>仕事に来るのを待って いればよい</p>	<p>小学校のときのよう にでき るはず</p> <p>作業的な内容にはも ともと 自信がある</p>			
10月20日	<p>「選別上手だね」</p> <p>(ポップコーンの袋詰め作業、 仕事量が少ない)</p>						
10月26日	<p>(周囲が片付けを始める)</p> <p>T2がレジピの紙について、T1 に「エラーは4枚」と報告</p> <p>「販売の練習をします。その時 は『買えや！』とか言うのはど う？」</p>	<p>行動を指示してほしい (間違えるのは嫌だ)</p> <p>(シーラーについて) 「これどうしたらいいですか？」</p> <p>つぶやき 「エラーが多いね。ポップコーンより は少ないけれど」</p>	<p>片付けられたいというこ とは分かっている</p> <p>私は失敗していい</p>	<p>間違えるくらいならやら ない</p>	<p>失敗は絶対にしたくない</p> <p>失敗は絶対にしたくない</p>		

月日	教師・他の生徒の働きかけ 周囲の環境の変化	生徒の行動 (A子)	A子の内面(推察)				その他
			要求	知識	自己認識	自己効力感	
10月27日	「ポップコーンを売るとどうなるの？」	B子の「売ってそのお金でホテル(のバイキングに行く)」を聞いて笑顔		売った様子で楽しいことがあるらしい			
	「店主さんをやる」と聞いて今の気持ちは？	「楽しみ、ちよっと緊張」 「小学校の時にやった」			出来そうだと思う	前やったことと同じならで きる	
	「店員さんになってもいいます」	表情がくもる			完璧にできるかどうかはわからない		
	店員のシミュレーションをさせる	2番目に立候補 接客は、よく出来ている		他の人が一度やったのを見てからやりたい		順番が最初だと自信がないけれど、やってみたい	
	「どうでしたか？」 (他の人の様子も含めて)	「C君が勝手に買ったポップコーン(を)取りました」 「久しぶりにやったら楽しかった」		やるべき行動はイメージできている			思っていたのと違う動きにはどうしたらいいかわからない
	「〇〇さんの『100円！』はおかしい？」	つぶやき 「気がつかなかった」			言葉遣いのことは意識して いなかった		
	(他の生徒の指摘) 「(上記生徒について)下を向いたままだった」	つぶやき 「私も下を向いていた」			自分も下を向いたままだった 失敗した		
	(A子の接客について) B子は客役の生徒が先にポップコーンカップを持って行ってしまつて愛想笑いしていたことについて「A子さんが笑っていた」	「すみません」 その後意見を言わない			失敗してしまつた		

月日	教師・他の生徒の動きかけ 周囲の環境の変化	生徒の行動 (A子)	A子の内面(推察)				その他
			要求	知識	自己認識	自己効力感	
10月28日	「なんで頭を掻いたり、つばのついた手で商品を触ってはいけないの？」	「汚さないように」 「不潔」	不潔に対する感覚あり			他の生徒で不潔に対する感覚の弱い生徒もいる→「味が変わる」	
	(ジュースの渡し方についての話題で話している)	「ジュースを二つ持つのは大変だと思っただ」	具体的な対処法はわからないけれど…	自分が客だったら困るだろうな			
	正しい順番を確認	(お金の受け取り方について) 「お金を(手渡しせずに)置く人もいてむずかしい」	上手くいかないことをお客さんのせいにはできない自分が何ともしないといけない				
	(ビデオを見ながら)「正しい行動は？」	「いらつしやいませ、ありがとうございます」 「両手で受け取る」			前回もできていた		
	「よくなかったところからいろいろ方法を考えて」	笑顔で「下を向くとよくないから前を向く」			下を向いてしまったけれど前を向けばいい	自分の失敗を元に、いい意見を言うことができた	
	感想を求める	「今日はちよいどいい声を出せた」			ちよいどいい大きさの声で話すことができた		
10月29日	クッキーショップで順番に買い物をする	するべき買い物をするので精一杯注文を促されて「C君が先でしよ」	パニック状態(知識を使っての行動はできない)	パニック状態(冷静な判断はできていない)	同じ学校の先輩でも初めてのひとと接するのは苦手	(普段は前から2番目にやりたいたいと要求することが多い)	
	(クッキーショップで飲み物を買ってから)「なんでもみんな緑茶なの？」	「大きい人とか怖い」 「メニューを見る余裕がなかった」	冷静に見ればやさしい言葉遣いだっただ		初対面の人はたいてい緊張してしまう	大きい人は怖い	
	(クッキーショップの接客について)「言葉づかいは？」	「優しくかった」				やさしい言葉遣いだし、怖い人ではなかったかも	
	「お金を落としそうなたきさつと手を差し伸べたね」	「かっこよかった」	怖いと思っていたけれど、気遣いをしてくれていた				
	この日の学習で学んだことのまとめ	(声の大きさについて) 「ボンボン声ではだめ」	相手に聞こえる声で話す方がよい		今回ちよいどいい大きさの声で話すことができた	ボンボン声ではだめだと高等部の先輩は言っていた	

月日	教師・他の生徒の働きかけ 周囲の環境の変化	生徒の行動 (A子)	A子の内面(推察)				その他
			要求	知識	自己認識	自己効力感	
11月2日	「どうしてボンボン話すのはよくないの？」	「お客さんがよく聞こえないから」		相手に聞こえる声で話す方がよい	前回ちよどよい大きい声で話すことができた		前回の授業で確認した
	「お客さんにはどんな気持ちにならしてほしいの？」	「うれしい気持ち」		店に来てうれしい気持ちにならうための接客をする			
	「店員さんが笑顔じゃなかったら？」	「入りにくい」 「怒っていたらやだ」		笑顔じゃないと怖い	自分も怖い店員さんのときは入りたくない		
11月5日	チケットの準備を指示	見ているだけで準備をしない →友達のを促して机を運ぶ					自分も机を運ばなければいけないことに気づいていなかった
	休憩を取るように伝える	B子が「休み時間もやりたい」と言ったのを受けて 「休み時間も切りたい」 「結構面白い」	よいことはまねしたい	休み時間でも休憩せずに仕事をしてもいいんだ			B子はとても意欲的でよいと思う
	チケット準備の片づけ	B子が自主的にゴミの後始末をしているのを見てゴミ集めを手伝う			B子が一人で仕事をしている 自分も手伝った方がいい	役に立てた	
11月6日	説明が終わって店の準備開始を指示	率先してテーパーブル拭きをする					これまでは率先した行動がほとんど見られなかったが、この時点から率先した行動が増える
	「(店員を)やってくれる人？」	率先して立候補	やりたい(一番最初でも)			練習を重ねたので一番最初でも出来ると思う	

月日	教師・他の生徒の環境の変化 周囲の(飲食物の場所を間違える男性客に)	生徒の行動 (A子)	A子の内面(推察)				自己効力感	その他
			要求	知識	自己認識	自己効力感		
11月8日	(接客)	笑顔で「こちらですよ」 「飲み物はこちらです」	お客さんには笑顔で接するこまっっているお客さんは助ける			声かけをすることがお客さんのためになっている役に立てている	大人の男性には恐怖心を持っていた 不特定多数の客に対する声かけをできた	
	(接客)	小学生のお客さんに合わせた対応をできている	お客さんに合わせて対応するのがよい		接客は上手くできた			
		(作文) お客さんがいっぱい来ていたの でみんなちやうどできました。			接客は上手くできた			
		(作文) 1回目はいらっしやいませをいわ すれちやうど2回目は言えまし た。はずかしかったけどがんばりま した。			1回目はうまいくいかなかったけれど、修正することですうまいくいきました	緊張していてもできた		
		(作文) えがおもできました。			笑顔を意識して接客できた			
11月10日	振り返りの作文を書かせる						同じ内容(ジュース担当)ならできるほかの担当でもできるとは思っていないかも	
		(作文) 店員をする前は、いちつしやいませをいえるかしんばいでした。おしごとをやってみて大へんでした。			心配事がたくさんあり、緊張もしていたやってみて大変だと思つた	次にやってみようと思つた自信がついた		
		(作文) りようでうまくできました。			大変だったけれど両手で商品をわたすこともがんばっていた			

3. まとめ

(1) 今年度の取組について

本稿では単元を中心とする学習発表会での活動よりも、そこに至るまでの事前学習の様子を主に紹介した。キャリア発達というのは、こうした日々の授業の中の小さな学びの積み重ねであると我々は考えている。昨年度の研究紀要で紹介したような「めった汁祭り」や「中3カフェ」、今年度紹介した「学習発表会の販売」など生徒が力いっぱい取り組める単元を設定しつつ、生徒の内面に寄り添った支援を行う必要がある。この「力いっぱい取り組める単元設定（以下「単元設定）」と「生徒の内面に合わせた支援・指導（以下「支援・指導）」の両輪があって、初めて生徒たちのキャリア発達を支援するための教育として機能する。しかし、今年度は「指導」についての話し合いを中心に行ったため、これまでのように「単元設定」の企画に割ける時間が少なかった。限られた時間の中で「単元設定」と「支援・指導」の両方を充実させることが今後の課題である。

「単元設定」においても「支援・指導」においても、よい実践を継続するためには、組織的な取組を行わなくてはならない。現状では話し合いの時間を多く持つことで組織的な取組となっているが、時間は限られている。教育課程や年間計画、教師の配置などを工夫することで、授業の質を高めていきたい。

(2) 今後の取組について

中学部では今後も「力いっぱい取り組める活動」を重視して取り組んでいこうと考えているが、あらためてこうした活動の定義を示したい。

本校中学部で考える「力いっぱい取り組める活動」

中学生という発達段階に相応しい、リアリティのある活動

- ・中学生である生徒にとって、真剣に取り組むに値する活動であること
- ・社会と触れ合うような経験を積めること

仲間と協力しなければ成し遂げられない活動

- ・どの生徒も取り組める活動が準備されていること
- ・それぞれ生徒のよさを発揮する場面があり、認め合うことができる活動であること

一つの活動を複数回繰り返すことができるほどの活動量があること

- ・達成感があり、自己効力感につながるような活動であること
- ・活動量の多さ自体がルーティン化という支援を生み出すような活動であること

今回紹介した販売活動もこうした点を考慮した単元であった。発達段階に応じたリアリティが感じられたかについては、単元が終了してから校外学習に行った際の生徒の反応からも読み取ることができる。ファストフード店の店員を見て「びっくりするくらい笑顔。」と言ったり、外国人観光客に英語で接する様子を見て感動したりするなど、店員の接客態度を、接客をする側の視点で捉えることができていた。これまでは漠然と眺めていた店員さんを、評価の基準を持つことで、あこがれるべき社会人として見ることができた。これが中学生段階として捉えてほしい、リアリ

ティのある店員さんの姿なのではないだろうか。

仲間との協力という点でもトウモロコシの収穫から含めて、中学部全員で取り組んできた実感は生徒たちも持っている事と思う。自転車整備をしているグループの生徒たちにしてみれば、ポップコーン粒の袋詰めが追いつかなそうなので手伝いをする。それでも生産が追いつかず、ポップコーン作りのグループが忙しそうだから販売を任せてもらう。そうした協力関係の中に「何で自分たちが？」という思いは感じられなかった。中学部の仲間という意識はこれまでの活動を通して培われてきているのだろう。

活動量に関しては、B子の事例となるが、この単元で見取ることができた。A子のような余裕もなく販売に臨んだB子は、表情が硬く、笑顔を意識できるような状況ではないようだった。そんなB子の笑顔が見られたのは、来客数が増え、接客に追われるようになってきた時である。いい接客について考えて行動する暇もなくなったときに、自然な笑顔がこぼれていた。活動量が増えることで接客に没頭し、目指していた店員としての姿が自然と現れてきていたのだと推察される。こうした点からでも、「力いっぱい取り組める活動」の有効性を感じることができる。組織的な取組によって課題を乗り越えつつ、継続的に取り組んでいけるようにしていきたい。

また、「支援・指導」に関しては、充実を図るために、授業の構造化を進めていく必要がある。今回の単元では、グループ外の教師1名が生徒の観察に徹する役目として授業に参加していたが、常時そのような体制をとるのは難しい。しかし、構造化を推し進めることで、生徒たちは主体性をもって授業に取り組めるようになり、教師には生徒の内面を推し量る余裕が生まれる。こうした授業改善も今後、一層推進していかなければならない。

（3）3年間での育ちを目指して

目の前の生徒の成長に注目すると、成長の大きさに驚くと同時に、「もっと成長させなくては」と焦りも生じてくる。A子は慣れない大人を怖がっていた。今回の単元では、社会との接点を求めて、外部講師を依頼して接客について指導してもらうこともできた。しかし、A子の実態を考えると、慣れない大人相手に、冷静に接客のコツを学ぶことができたか疑問である。国立教育政策研究所は、中学生段階のキャリア教育のキャッチフレーズとして、「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」と示しているが、A子の現状では、社会とつながるまでにはまだ時間が必要であると思われる。また、本校で平成27年3月に行われたワークショップでも、中学部段階の調理実習では「誰かのために作る」という内容が相応しいという話し合いがあった。現状では自分の食べたいものを作ることが多く、中学生に相応しい活動となるよう考え直す必要がある。

しかし、本当に目指すべき姿は、3年間の学びの中で「社会とのつながりを持ちたい」という気持ちを育てることである。3年間かけて「本物の店員さんに接客を教えてもらいたい」、「誰かに自分が作ったものを食べてもらいたい」という気持ちを、教え込まれるのではなく、自ら思える生徒に育てることが目標である。

中学部1年生になりたての頃は、自己中心的な考え方をする生徒が多い。本校では1年生の終わりに、卒業生を送る会の手伝いで3年生をもてなす行事がある。その活動を通して、人のために働くことを覚える。そして、2年生になって新入生を先輩として迎え、学部中心となってイベントを企画し、3年生を送り出して最上級生となる。その頃には「誰かのために」「みんなで」と考えられるようになってくる。今年度の取組では、1年生の生徒が自信を持って接客できるようになるまでを紹介した。学習発表会のポップコーン販売で、最初に客として売り場に訪れた男性

相手に、笑顔で接することができるほどに成長した彼女なら、外部講師の説明を冷静に聞けるかもしれない。そうした小さな成長に注目しながら、今後も生徒の成長を支援できるような教育活動を続けていきたい。

注

- (1)本校では「自己効力感」を「根拠のある自信」として定義づけているが、中学部の章では「根拠のない自信」も含めた、「活動に取り組もうとする意欲」として扱っている。
- (2)ここで言う自信は根拠のあるなしに関わらない自信である。
- (3)一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

参考文献

1. 名古屋恒彦（2015）「子ども主体の生活を実現する領域・教科を合わせた指導」本校職員研修資料
2. ナビゲート ビジネス基本用語集